船橋税務署長賞

学びを支える税

船橋市立海神中学校
第二学年　野間　友夏

ポツン。ポツン。ポツン。雨が降る日、廊下と壁際には毎回バケツと新聞紙が置かれる。天井から雨漏りしているからだ。校舎の壁はボロボロで床もところどころミシミシいい、出っ張っていて転びそうなところもある。それにランチルームがすごく狭い。この前、部活の大会で行った学校はすごく綺麗だった。壁は綺麗な白色で、床は頑丈で、ランチルームもまるで体育館のような広さだった。私は練習試合で行ったりする他の学校のピカピカな校舎を見るたびに「なぜ私の学校はこんなにボロボロなのだろう。先生たちも大変そうにしているし、税金などで綺麗にすることはできないのだろうか。」と強い不満を抱いていた。

そこで調べてみると、学校によって校舎の綺麗さが違うのは、地方自治体の財政力と税金の仕組みに原因があることを知った。公立学校の建築費は、国からの国庫補助金と、自治体自身が住民税などで賄う地方費で構成される。しかし、国の補助金は原則３分の１に留まるため、残りの大部分は自治体の税収に頼らざるを得なくなり、企業や住民が多く税収が豊かな都市部は、頻繁に建て替えやリフォームを行えるそうだ。一方、過疎化が進む地域は税収が少なく、予算を福祉や医療へ優先的に配分するため、私たちの校舎の補修が後回しになる。この税収差が校舎の格差を生んでいるのだ。

私の学校の雨漏りは、単に放置されているのではなく、地域全体で予算が逼迫しているという厳しい現実の裏返しだったのだ。

日本全体を見渡すと、高度経済成長期に建てられた多くの学校や橋が一斉に寿命を迎えているという。しかし、現在は少子高齢化で社会保障費は膨らみ、さらに人口減少で自治体の税収は減っている。つまり、「雨漏りをする学校」は私の学校だけの問題ではなく、これから日本が直面する「税金の使い道のジレンマ」そのものだった。私たちは限られた「社会の会費」をどう分かち合うべきなのか深く考えさせられた。

これまで私は税金というものはそこら辺で勝手に使われているものだと思っていたが、実際そうではない。物事の優先順位を一生懸命に考えて大切に使っているということがわかった。学校の校舎が綺麗でもボロボロでも学びたいという気持ちはもちろん変わらない。だからこそ、将来も税金の使い道に関心を持ち、選挙などを通じて意思を示せる責任感のある納税者になりたい。そして次の世代の子たちが雨の日にバケツや新聞紙を見なくて済むような社会を今度は私が税金で支えたい。